

研究ノート

ポカホンタスによるスミスの助命論争 ―再考―

佐藤 円

キーワード

ポカホンタス ジョン・スミス 助命論争 パウハタン ヴァージニア植民地

はじめに

二〇〇七年は一六〇七年のイングランドによるジェームズタウン入植から四〇〇年目にあたり、それを記念するために、エリザベス二世イギリス女王のジェームズタウン訪問など様々な行事が、その実行組織であるジェームズタウン二〇〇七 (Jamestown 2007) を中心に執り行われた。<sup>1</sup> このジェームズタウン入植は、一般にはイングランドの北アメリカにおける初の恒久的な植民地であるヴァージニア植民地の建設の契機として記憶されているが、ナショナルリ

ズムの観点からは、それをもってアメリカ合衆国（以下アメリカと略す）という「偉大な国家」の起源であるとし、しばしば評されてきた歴史事象でもある。それだけに、アメリカではこの二〇〇七年の記念行事には高い関心が払われていたが、それに付随するように、一六〇七年のイングランド人によるジェームズタウン入植に重要な貢献をしたとされるアメリカ先住民女性ポカホンタス (Pocahontas) に対する関心も再燃し、彼女の伝記があらためていくつか出版され、新しい伝記映画が製作されて、公開されました。そこで語られるポカホンタスにまつわる逸話のうち最も注

目されるものは、相変わらず、彼女が属していたパウハタン族 (the Powhatan)<sup>2</sup> に捕えられ、彼女の父親であるパウハタン (Powhatan)<sup>3</sup> 大族長の命により処刑されそうになった植民者のジョン・スミス (John Smith) を、彼女が身を挺して救ったという話である。実際に、二〇〇五年に公開されたテレンス・マリック (Terrence Malick) 監督によるポカホンタスの伝記映画『ニュー・ワールド』 (The New World) では、この出来事を物語の重要な見せ場としながら、ポカホンタスとスミスの恋愛を軸とするポカホンタスの一生がロマンチックに描かれていた。<sup>4</sup>

このマリック監督による映画はまさにその典型と言えるが、一般に流布しているイメージのなかでは、ポカホンタスがスミスを助命したという逸話は一貫して史実として受け止められてきており、小説や絵本、あるいは絵画や映画のなかで繰り返し語られてきた。<sup>5</sup> これに対して学界では、一九世紀の半ばにこの逸話は、その出来事に関する唯一の証言者であり、またその当事者でもあったスミスによって捏造されたものであるという批判が出て以来、今日に至るまで、ずっとその真偽が論争となってきた。そのため学術研究においては、スミスの助命を中心とするポカホンタスにまつわる逸話の多くは史実としてではなく、むしろ植民者である「白人」<sup>6</sup> にとって都合よく創り上

げられた「伝説」、あるいは「神話」としてしばしば論じられてきた。<sup>7</sup> しかしその一方で、ポカホンタスによるスミスの助命という逸話については、現実に起こった出来事である、あるいは証言を史料として残したスミスによる事実誤認はあるが、基本的にはスミスが見たままを伝えたものであると、捏造という評価を否定する議論も続けられてきた。このような学界の事情を反映して、近年出版されたポカホンタスの伝記や関連書籍においても、ポカホンタスによるスミスの助命についての記述は一致しない。例えば、二〇〇三年に出版されたジャーナリストのデイビッド・プライス (David Price) が著した *Love and Hate in Jamestown: John Smith, Pocahontas, and the Heart of a New Nation* では、ポカホンタスによる助命は明白な事実として扱われているのに対して、翌年出版された歴史学者のカミラ・タウンゼンド (Camilla Townsend) が著した *Pocahontas and the Powhatan Dilemma* では、そのような出来事は実際には起こらなかったときっぱりと否定されている。<sup>8</sup>

そこで小論では、このような記述の不一致のもととなっているポカホンタスによるスミスの助命という逸話をめぐる学界での論争について、まずスミスが残した史料について紹介した上で歴史的に概観し、この論争をめぐる議論が

時代とともにどのように展開されてきたのかを整理してみたいと考えている。またその際には、特に二〇〇〇年代になって初めて出版された先住民の著者による二つのポカホンタス伝に注目し、このポカホンタスをめぐる論争に先住民が参入するという新しい状況にはどのような意味があるのか、私見をまとめてみたい。

### ポカホンタスによる助命を伝えるスミスの史料

そもそも、ポカホンタスによるスミスの助命という出来事は、イングラント人によるジェームズタウン入植直後の一六〇七年一二月末か、翌年の一月初めに起こったとされているが、先に述べた通り、この出来後については、スミスが残した史料にしか証言が残されていない。それゆえにその信憑性が常に議論的となってきたのであるが、手始めに、スミスが残したこの出来事に関する史料にはどのようなものがあるのか、時系列的にその概要を説明したい。

まず、この出来事について言及している最も古い史料であるが、それは、イングラントに到着したポカホンタスを紹介するために、一六一六年にスミスがイングラント国王妃のアンへ送った手紙であるとされている。そこでスミスは「私の処刑の瞬間、彼女は自らの頭が叩き割られる危険

を冒して私を救おうとしたのです」とポカホンタスの献身的な振る舞いについて説明している<sup>①</sup>。しかし、実際のところ、この手紙は原本が存在しているわけではなく、助命の話が最も詳細に書かれている一六二四年に出版された *The Generall Historie of Virginia, New-England, and the Summer Isles* (以下小論では『ヴァージニアの歴史』と略記する) に再録されているものである。このため、この手紙が本当に一六一六年に書かれ、王妃に送られたものか、あるいは後年になってスミスによって捏造されたものか、研究者の間では意見が割れている。

次に古い史料は、一六二二年に出版された、もともとは一六二〇年に出版された *New England Trials* の第二版にある記述であるが、そこでスミスは「最大の窮地に陥ったときにパウハタン族は私に矢を射かけ、私の部下を三人殺害し、愚かにも退却に際して私を捕虜とした。しかし神様が王の娘であるポカホンタスのことを、私を救い出す手段にしてください」と本当の話である」と曖昧な表現で助命の話を記述している。この史料こそが、刊行されたものとして現存するポカホンタスによる助命を伝える最古の史料であるが、そこにある説明では、具体的にポカホンタスがどのように「救い出す手段」として振る舞ったのか詳細は分からない。また、一六二三年にスミスが書いた、当

時パウハタン族による攻撃で大きな被害を受けたヴァージニア植民地を再建するために組織された王立委員会宛ての報告書にも、「神様が、彼らの偉大な王の娘を、私が安全にジェームズタウンへ帰還するための手段にしてください」とほぼ同じ内容の簡単な記述がある。しかし、この説明でも、詳しい事情は分からない。

翌一六二四年に出版された『ヴァージニアの歴史』こそが、先に述べた通り、ポカホンタスによるスミスの助命という逸話について最も詳しく伝えている史料であり、その後現在に至るまで一般に流布しているポカホンタスにまつわる逸話の多くの典拠となっているものである。そこには、捕虜となったあと、パウハタン大族長が暮らす集落ウエロウオコモコ (Werowocomoco) へ連行されたスミスが、大族長との謁見に続いて以下のような状況に陥ったと書かれている。

そしてパウハタン族は、野蛮人としては最高のもてなし方でスミスにご馳走を振る舞ったあと、長い協議を行った。その結果二つの大きな石がパウハタンの前に運ばれてくると、スミスはたくさんの男たちに取り押さえられ、その二つの石まで引きずられていった。そして石の上に頭を乗せられ、まさに棍棒によってスミスの頭が打ち砕かれようとしたその時、王の愛娘であ

るポカホンタスが、もはやいかなる嘆願も聞き届けられないと知ると、スミスの頭を腕で抱え込み、彼の命を救うために自分の頭を彼の頭に重ね合わせた。それを見たパウハタンは、スミスを生かしておくことに同意し、スミスに、パウハタンのためには斧を、またポカホンタスのためには鈴やビーズや銅釜を作らせることにした。

この『ヴァージニアの歴史』を出版してからしばらくたった一六三〇年にスミスは死亡したが、その同じ年に彼の最後の著作である『True Travels, Adventures and Observations of Captain John Smith』が出版された。ここでも助命の話が触れられているが、単にパウハタンは「彼を殺すように命じ〔中略〕ポカホンタスが彼の命を救った」とごく簡単に触れられているのみである。この史料の記述はあまりにも短く、また『ヴァージニアの歴史』における詳しい説明の出版後であるため、さして重要なものとは言えない。

以上の五つが、スミスが残したポカホンタスによるスミスの助命を伝える史料の全てである。結局のところ、一六二四年の『ヴァージニアの歴史』以外に、ポカホンタスによる助命についての具体的な記述を含む史料はなく、他の同時代人が残した史料に助命の話が出てくる場合で

も、それはみな『ヴァージニアの歴史』出版以後に、同書を典拠に書かれたものだけである。<sup>16)</sup>

### ポカホンタスによる助命をめぐる論争

先に述べた通り、このポカホンタスによるスミスの助命という逸話については、その真偽をめぐる論争が一九世紀の半ばから繰り広げられているが、それに火をつけたのは、アメリカ大統領を祖父と曾祖父にもつ文筆家であり歴史学者でもあったヘンリー・アダムズ (Henry Adams) が、一八六七年に『北米評論』(North American Review) に発表した論文であった。アダムズは同論文において、スミスの最も古い著作であり、彼のパウハタン族のもとでの虜囚体験についても詳しく書かれている A True Relation of Such Occurrences and Accidents of Noote as Happened in Virginia (以下小論では『真実の物語』と略記する) では、ポカホンタスによるスミスの助命の話が全く出てこない一方で、一六二四年に出版された『ヴァージニアの歴史』に突然現れることの不自然さを、二つの史料を併載しながら指摘し、助命の逸話はポカホンタスの名声を利用して、自らの社会的評価を上げようとしたスミスによる捏造であると断定した。<sup>17)</sup>

実際のところ、このスミスが残したこの二つの史料にある同じ虜囚体験についての内容の不一致については、すでに実業家であり歴史学者でもあったチャールズ・ディーネ (Charles Deane) が指摘していたことだった。ディーネは一八六〇年に、ヴァージニア植民地評議会の初代議長を務めていたエドワード・マリア・ウイングフィールド (Edward Maria Wingfield) が書いたヴァージニア植民地の記録 A Discourse of Virginia を出版したが、そのなかで長い注記を書き、このウイングフィールドの記録にも、スミスがパウハタン族側の捕虜となり、後に解放されて帰還したことは述べられているものの、ポカホンタスによるスミスの助命については一切触れられていないと指摘し、その上で、スミスには誇張癖があり、助命の話は自分を重要人物にしたてあげるための粉飾であって、それが出てこないスミスの最初の著作『真実の物語』のほうにこそより真実が書かれていると主張していた。<sup>18)</sup> アダムズは、自身の論文でも言及している通り、このようなディーネの主張に沿って議論を発展させたのであった。

アダムズによって本格的に始められたスミスが残した史料の信憑性をめぐる批判は、その後の研究に確実に影響を与えた。例えば、歴史学者で牧師でもあるエドワード・E・ニール (Edward E. Neill) は、アダムズの論文が

発表された二年後の一八六九年に出版した *History of the Virginia Company of London* のなかにポカホントスの生涯について書いた章を設け、そこで、彼女がスミスを助命した話はスミスが書いた最初の記録にはないにもかかわらず、一五年以上たって書いた『ヴァージニアの歴史』に突然現れるのはおかしいと指摘し、その上で別の章の注記において、スミスが残した史料は「ほら吹き物乞いが書いたものである。彼は自分が行ったのだと主張する功勞に対して、いつも承認と報酬を求める態度をとっていたように思われる」とスミスを痛烈に批判している。<sup>19)</sup>

このようなスミスには「誇張癖がある」、あるいは「ほら吹きだ」といった批判はニールにとどまらず、その後今日に至るまで出版された多くの歴史書や伝記のなかでよく見られるスミス評価となった。例えば歴史学者のポール・ルイス (Paul Lewis) は、一九六六年に出版したスミス伝 *The Great Rogue: A Biography of Captain John Smith* において、スミスの残した史料の間にみられる不一致を理由に、彼の説明には粉飾があると主張し、ポカホントスによる助命の話をスミスが書くのは、彼女がイングランドに渡り、ロンドンで有名になってからのことだと指摘することで、暗にスミスがそのことから利益を得ようとしていたと示唆している。<sup>20)</sup>

以上のようなアダムズらのスミス批判に対して、最初に熱心な反論を行ったのは、歴史学者で独立革命期のヴァージニアの政治家パトリック・ヘンリーの孫にあたるウィリアム・ワート・ヘンリー (William Wirt Henry) であった。彼は一八七五年に雑誌 *Potter's American Monthly* に発表した論文において、スミスの『真実の物語』に処刑されうになったところをポカホントスによって助命されたという話が書かれていないのは、スミスがそのような先住民側の敵意について書くことによって、ヴァージニア植民地建設がうまくいっていないという印象が広まることを恐れたためだと説明した。その上で、助命の話は一六一六年のアン王妃に送った手紙では言及されており、その真偽を知り得るはずのスミスと同時代人の誰からもスミスが嘘をついていると批判されていないのだから、彼の言うことは信用でき、ポカホントスによる助命という出来事も事実であると主張した。<sup>21)</sup>

このヘンリーによる反論が掲載された雑誌は、アダムズが論文を発表した『北米評論』に比べると影響力が少ないものであったため、ヘンリーの主張は、必ずしも一般には注目されてこなかったが、それでもヘンリーのアダムズらに対する反論に賛同する論者は、その後も少なからず現れた。例えば、一八九三年に *Captain John Smith and His*



*Critics* を出版したヴァージニア州立図書館司書のチャールズ・ポインデクスター (Charles Poindecker) は、そのなかで、処刑や助命の話が出てこない『真実の物語』のほうこそ、ヴァージニア会社の株価投機を目的に、先住民との関係がうまくいっているかのように事実を歪曲して書かれたものだと説明し、野蛮人であるポカホンタスは、先住民が見たこともないような武器を持つスマイスに魅了されて彼を救ったのだと、助命の話をもマン化した上で事実だと断定している<sup>22)</sup>。

このような賛同者のうち、最も詳細な議論を展開しながらヘンリーを擁護した人物が、ポインデクスターから一世紀を経て現れた。それが文学者であり歴史学者でもある J・A・リオ・ルメイ (J. A. Leo Lemay) である。彼は一九九一年にスマイスの伝記である *The American Dream of Captain John Smith* を、そして翌一九九二年には助命の話の真偽を検討した *Did Pocahontas Save Captain John Smith?* を出版したが、特に後者において、アダムズ、ディーン、ヘンリーの議論を仔細に比較検討を加えた上で、ヘンリーの議論のほうに軍配を挙げ、ポカホンタスによるスマイスの助命を伝えるスマイスの史料は真実を記したものであると判定した。その際ルメイはヘンリーの反論を補強するため自らの反論も議論に加えたが、そのなかで、アダ

ムズのスマイス批判の真意は南北戦争後の政治状況を背景とした北部人による南部批判であり、南部の権威を否定するために、ヴァージニア植民地の歴史に泥を塗ろうと試みたものだったと主張した<sup>23)</sup>。

他方ルメイは、スマイスが伝える助命の話が真実であることの傍証として、さらにもう一つ重要な論点も挙げていた。それは、スマイスが先住民の養子縁組の儀式を誤解して、自分が処刑されそうになったのだと思い込んだという説である。実際のところ、ルメイもその著書で指摘している通り、このような文化的な解釈はすでに一九世紀中にも見られ、その後現在に至るまで、繰り返しスマイスが語る助命の話は事実であるという議論を補強するために利用されてきた<sup>24)</sup>。例えば、スマイスの全集を編纂し、スマイスとポカホンタスの伝記を書いた歴史学者のフィリップ・L・バーバー (Philip L. Barbour) も、一九七〇年に出版した彼のポカホンタス伝のなかで、処刑と助命の場面はあくまで先住民の成人式の一部であって、スマイスはポカホンタスを後見人に、処刑のように見える儀式によって生まれ変わり、部族の男として受け入れられたが、それをスマイスは誤解したのだと主張している<sup>25)</sup>。

## 先住民の手によるポカホンタス伝

以上のように、一九世紀の半ばから今日まで続いている、ポカホンタスによるスミスの助命をめぐる論争は、実質的には、内容が一致していないスミスが残した二つの史料のどちらの方が事実を伝えているのかということに論点が集約してきた。それを明らかにするために、スミスの史料と同時代人の史料の比較をしたり、議論の対象となつて二つの史料以外も含めたスミスの史料の信憑性についての検討も行われてきた。これらの作業は、換言すれば、史料批判に基づく史実の探求という歴史学的な検討が行われてきたということである。

このような言わば史料中心の実証主義的な議論に対して、二〇〇〇年代に入って出版された二つの先住民の著者によるポカホンタス伝は、全く異なる視点と手法を論争に持ち込んだ。それら二つの伝記の著者たちは、そもそもスミスの史料はあくまでヨーロッパ人から見たポカホンタスを描いているものに過ぎず、先住民の視点から見た場合には事実とは異なる主張しただけでなく、スミスの史料に必ずしも依拠しない新たな手法を持ち込んでポカホンタスの生涯を描こうとした。

まず、フェミニストの文学者で、アメリカ先住民につ

いての文化人類学的研究にも携わってきたラグーナ・プエブロ族 (the Laguna Pueblo) 出身のポーラ・ガン・アレン (Paula Gunn Allen) は、二〇〇三年に出版した *Pocahontas: Medicine Woman, Spy, Entrepreneur* において、ポカホンタスのことを、スミスやその同時代人の史料が描くような、そしてそれらに依拠する従来の伝記の著者たちが描くような、従属的で主体性のない女性としてではなく、パウハタン族を守るために自らすすんで植民者との仲介者になつて活躍した自立心のある女性として描いた<sup>26</sup>。アレンは、スミスが残した史料の信憑性について、そこに書かれていることが事実であるかどうかよりも、彼ら先住民に対する理解が当時のヨーロッパ人的偏向に満ちている点こそが問題であるとして、スミスの史料を利用してついても、それを当時のパウハタン族の宗教や精神文化に基づく世界観から再解釈して、全く異なるポカホンタス像を提示してみせた。そのうち特にポカホンタスによるスミスの助命については、むしろその出来事の重要性を、女性が社会的に重要な役割を担っていた当時の先住民社会の構造や価値観から再解釈し、助命とされる出来事が、実際にはスミスがパウハタン族の一員として受け入れられる儀式であり、子供であつたにもかかわらず、すでにメディスン・ウーマン (女性呪術師) として認められていたポカホンタスが



儀式ではスミスの後見人の役割を務めたものだったと説明した。<sup>27)</sup>当然のことながら、このようなアレンの説明には、植民者に恋をした先住民女性というロマンチックに神話化されたイメージが入り込む余地はない。

しかし、そこで問題となったのは、そのようにポカホントスをアレンが描写する際の根拠であった。実際のところ、彼女の伝記には情報の典拠を示す注記がほとんどつけられておらず、そこに書かれていることとどこまでが創作で、どこまでが彼女の文化人類学者としての知識を駆使した新解釈であるのかが判然としない。文学者でもあるアレンは、そもそも西洋的な価値観に基づく学術研究の実証主義には懐疑的で、このポカホントス伝においても、それに捉われる限り先住民の歴史や文化を事態に即して語ることは困難であると示唆している。<sup>28)</sup>しかしその代わりに彼女が採用した手法が、夢や幻の話と現実をないませにしながら出来事について複合的に描写するという伝統的な先住民の「語り(story telling)」であったため、この実証を求めない、言わば空想をも含む文学的「物語」を、はたして通常の歴史学研究が「歴史」として認めるかは、はなはだ疑問だと言わざるを得ない。実際に、アレンのポカホントス伝は文学としては評価され、ピューリッツァー賞の候補にもなったが、歴史学の分野ではほとんど議論の対象として取り上げ

られることはなかった。

このようなアレンのポカホントス伝に対し、パウハタン族の末裔であるマタポナイ族 (the Mattaponi) の歴史学者リンウッド・リトルベア・カストロウ (Linwood “Little Bear” Custalow) と部族公認の文化人類学者アンジェラ・L・ダニエル (Angela L. Daniel) が、ジェームズタウン入植四〇〇周年の二〇〇七年に出版した *The True Story of Pocahontas: The Other Side of History* は、アレンの伝記とは異なり、マタポナイ族に伝わるオーラル・ヒストリーに基づきながら、スミスなど植民者が残した史料が語るポカホントスとは全く異なるポカホントス像を提示するものだった。<sup>29)</sup>このカストロウとダニエルによる伝記に登場するポカホントスは、従来のようなスミスとの特別の(しばしば恋愛として描かれる)関係にあった女性としてではなく、むしろ父親であるパウハタン大族長との深い愛情で結ばれ、パウハタン族に対しても強い愛着を感じていた女性として描かれている。また助命に関しては、イングルランド人を同盟に引き込むためのパウハタン族による養子縁組の儀式をスミスが誤解したものだとした上で、アレンとは異なり、まだ子供であったポカホントスはそもそもそのような重要な儀式に出席することは許されておらず、ポカホントスによる関与は全くなかったと説明されている。全体

として、カストロウとダニエルが語るポカホンタスは、アレンが提示した自立した強い女性とは異なり、父親に対して従順で、無力な存在であり、ついには植民者に捕えられて、徹底的に利用された被害者というものであった。

さて、カストロウとダニエルがそのようなポカホンタス伝を書くにあたって、何に依拠していたのかと言えば、註記を見る限り、出来事の基本的な説明に関しては、やはりスミスの史料を利用しているようであるが、その一方で重要な部分になると、「マタポナイ族の聖なるオーラル・ヒストリーによるもの」(according to Mataponi sacred oral history)」という前置きつきで、スミスの証言とは全く異なる説明が独自に展開されている。そしてその典拠については、本書の序論によると、部族に継承されてきたオーラル・ヒストリーを永年にわたり学んできた著者の一人であるカストロウの語りを載録したものだとなっている<sup>⑧</sup>。つまり、その他には客観性を担保できるような史料や傍証が何も提示されていないのである。このようなポカホンタス伝を、通常の歴史学研究が「歴史」として認めるかは、アレンの場合と同様に大いに疑問である。実際に、このカストロウとダニエルのポカホンタス伝は、歴史学界からはほとんど無視され、主要な学術雑誌では書評にも取り上げられなかった。

## おわりに

以上のように、ポカホンタスによるスミスの助命という逸話をめぐる学界の論争は、それが一九世紀に始まってから最近に至るまでは、主にスミスが残した史料の信憑性と、そこに書かれている助命という出来事の解釈を中心に展開されてきた。スミスの史料は信用できないとする側は、助命という逸話は、ポカホンタスの名声を利用しようとしたスミスによって捏造されたものであると主張してきたのに対し、スミスの史料は信用できるとする側は、助命は実際に行われた、もしくは養子縁組の儀式を誤解したスミスが、処刑されそうになったところを助命されたと思い込んだのだと主張してきた。結局のところ、そのどちらが正しいのかについては、利用できる史料に絶対的な制約があり、今後も完全に決着がつくことはないものと思われる。オーソドックスな歴史研究では実証に限界があり、またそれだからこそ文化人類学の知見を援用して史料の再解釈も行われてきたのであるが、それもあくまで利用できる史料をめぐる議論であり、新しい証拠でも発見されない限り、これ以上何が明らかになるとは考えられない。

さて、それではこのようなポカホンタスによるスミスの助命をめぐる歴史研究の限界に対し、二〇〇〇年代に出版

された先住民の著者によるポカホンタス伝は、どのような影響を与えるものなのであろうか。確かに小論で紹介した二つの伝記は、どちらも実証性の乏しさから、歴史学界からはほとんど無視されている状況にある。しかしそれでも筆者には、従来からの「学術的」議論では看過されてきたある重要な問題を提議しているように思えてならない。それは、助命という逸話の一方の主人公でありながら、常に客体として扱われてきたポカホンタスの主体性と名譽の回復という問題である。つまり、彼女がスミスのことを身を挺して助命したとされるのが、どのように植民者側から利用されてきたのか。あるいは、その後彼女が植民者側に誘拐されたにもかかわらず、自ら植民者と暮らすことを選んだと言われ、その上キリスト教に改宗し、スミスとは別の植民者の男性と結婚し、さらにはその子供を産み、一家でイングランドに渡って、ヴァージニア会社の植民活動の宣伝に一役買ったということが、どのように「白人」中心の社会において意味づけされてきたのかという問題である。この言わば「白人」にとつて都合がよいヨーロッパ中心主義的な、そして先住民側から見た場合には「裏切り者」のポカホンタス表象の問題については、文学評論を中心に、これまでも様々に論じられてきたが、スミスが残した史料が事実を伝えているのかどうかというような歴史学におけ

るミクロな議論では、何も解決しない。

二〇〇〇年代に登場した先住民の著者による二つのポカホンタス伝は、確かに実証性には乏しく、「客観的」な史実の解明を求めてきた従来からの歴史研究から見た場合、それを「歴史」として受け入れることは難しいかもしれないが、それだからと言って、単純にヨーロッパ中心主義に対抗する先住民中心主義による本質主義的な歪曲として切り捨てることには、いささか抵抗を感じる。なぜなら、従来からの歴史研究が依拠してきたスミスが残した史料も、たとえ捏造ではなく見たままを伝えていたものだとしても、それがどこまでヨーロッパ人的偏向に影響されたものかを判断することは、文化人類学の知見を利用して史料を再解釈したとしても、決して容易ではないからである。また、そのような史料を使って再構成される「歴史」が、どこまで客観的であると言えるのか、難しいからである。

ポカホンタスによるスミスの助命という逸話をめぐる論争に対する、言わば先住民側からの異議の申し立てである二つの伝記は、アメリカの歴史のなかで常に客体として扱われてきた先住民の歴史における主体性の回復を、相変わらず「白人」が残した史料に依拠しながら研究を続ける歴史学はどのように行っていくのかという難問を我々に投げかけている。

ポカホンタスによるスミスの助命論争 (佐藤)

註

- (1) 詳細は以下の公式ホームページ参照。 <http://www.jamestown2007.org/>
- (2) この先住民の部族名は、従来日本において「ポーハタン」と音訳されてきたが、小論ではより原音に近い「パウハタン」と表記する。パウハタン族は多くの小部族を統合した先住民の連合体で、一七世紀初頭には一万三〇〇〇〜四〇〇〇人余りの人口を有し、現在のヴァージニア州の海岸地域一帯を支配下に治めていた。Helen C. Rountree, *The Powhatan Indians of Virginia: Their Traditional Culture*, University of Oklahoma Press, 1988, p.15 を参照。なお、小論においては、先住民の民族的集団を呼ぶ場合に「族」あるいは「部族」という用語を使用するが、近年これらの用語を「民族」の同義語として特定の地域の先住民族や少数民族に対してのみ用いることについては、そのような対象による用語の使い分けがもつ西洋中心主義的、植民地主義的含意について文化人類学者らが厳しく批判している。しかし歴史学研究である小論においては、そのような人類学からの批判の今日的妥当性を承認しつつも、「族」あるいは「部族」という用語がもつ歴史性を重視して、暫定的に使用し続けるものとする。
- (3) 大族長の名前は部族名と同じ「パウハタン」とされているが、これは君主号のようなもので、もともとは先住民の集落名に由来すると言われている。さらに彼には、ワフンセナカウ (Wahunsenacawh) という本名や、それ以外にもいくつかの名前があったとされている。Helen C. Rountree, *Pocahontas, Powhatan, Opechancanough*:  
  - (4) *Three Indian Lives Changed by Jamestown*, University of Virginia Press, 2005, pp. 32-33.
  - (5) *The New World*, directed by Terrence Malick, Susan Green Film, 2005.
  - (6) 近年のそのような例のなかでも一九九五年に公開されたウォルト・ディズニー社の長編アニメーション『ポカホンタス』(*Pocahontas*, directed by Mike Gabriel and Eric Goldberg, Walt Disney Pictures, 1995) が与えた影響は非常に大きかった。この長編アニメーションの公開によって、アメリカでのポカホンタスに対する注目があらためて高まっただけでなく、それまで無名であったポカホンタスの知名度が日本においても一挙に上がった。
  - (7) 人種主義を排し、表現の厳密さを求めるならば、「白人」という用語ではなく、「ヨーロッパ人」あるいは対象とする時代によっては「ヨーロッパ系アメリカ人」という呼称を使用すべきであろうが、あえて多様なヨーロッパ系の人々を一括して「白人」と呼ぶことで、歴史的に構築されてきた彼らの人種的アイデンティティを集合的に表現しうるために、小論ではあえてカギ括弧を添えて「白人」という呼称を使用することとする。
- (7) このようなポカホンタスに関する研究状況は日本でも同様であり、これまで彼女の神話化された表象をめぐる文学的評論を中心に多数の研究が発表されてきた。それらのうち、書籍でポカホンタスを論じている主な研究を挙げてみると、以下のようなものになる。富田虎男『ポカホンタス』(猿谷要、城山三郎、常盤新平編『人物アメリカ史』第一巻(集英社、一九八四年)三一・五六頁)、荻田元司『ポカホンタスとマ

シーセン―アメリカ文学討論集』(山口書店、一九八六年)、小山敏三郎「ジョン・スミスとポカホンタス―神話からフェミニズムへ」同著者『セイラムの魔女狩り』(南雲堂、一九九一年)九―三三頁、正木恒夫「ポカホンタスと食人種」同著者『植民地幻想―イギリス文学と非ヨーロッパ』(みすず書房、一九九五年)一六―三四頁、中尾秀博「陽画(ボジ)と陰画(ネガ)の構図―ポカホンタス神話をめぐって」渡辺利雄編『読み直すアメリカ文学』(研究社出版、一九九六年)一八―三七頁、阿部珠理「ポカホンタスあるいは神話の超克」後藤昭次編著『文学と批評のポリティックス―アメリカを読む思想』(大阪教育図書、一九九七年)四三―五六頁。なお、アメリカにおけるポカホンタス表象の歴史の変遷については、むしろ Robert S. Tilton, *Pocahontas: The Evolution of an American Narratives*, Cambridge University Press 1994 を参照。

(8) David Price, *Love and Hate in Jamestown: John Smith, Pocahontas, and the Heart of a New Nation*, Alfred A. Knopf, 2003; Camilla Townsend, *Pocahontas and the Powhatan Dilemma*, Hill & Wang, 2004.

(9) スミスが残した全ての史料は、スミスやポカホンタスの伝記研究を行ったフリーリップ・L・バーバー (Philip L. Barbour) によつて全集としてまとめられており、小論でも史料としてはそれを使用する。Philip L. Barbour, ed., *The Complete Works of Captain John Smith (1580-1631)*, 3 vols., University of North Carolina Press, 1986.

(10) なお、助命の逸話を含むポカホンタスに関わる全ての史料と、それに基づく彼女の生涯について小論で詳しく説明

することは紙幅の関係上できないので、それについては下を参照していただきたい。佐藤円「史料が語るポカホンタス」『大妻比較文化』一六号、二〇一五年、七二―九九頁。

(11) Barbour, ed., *The Complete Works of Captain John Smith*, vol. 2, p. 259.

(12) *Ibid.*, vol. 1, p. 432.

(13) Edward Arber, ed., *Travels and Works of Captain John Smith*, John Grant, 1910, p. 611.

(14) Barbour, ed., *The Complete Works of Captain John Smith*, vol. 2, p. 151.

(15) *Ibid.*, vol. 3, p. 237.

(16) 例えは、牧師のサミュエル・パーチェス (Samuel Purchas) は、その大部分を他者の旅行記からの引用で集めた *Purchas His Pilgrimage: or, Relations of the World and the Religions observed in All Ages and Places discovered, from the Creation unto This Present* の初版を一六一三年に出版したが、そこではポカホンタスによるスミスの助命について書かなかったが、一六二四年にスミスが「ヴァージニアの歴史」を出版した翌年に出版した同書の第四版では、助命の逸話を書き加えている。

(17) Henry Adams, "Captain John Smith," *North American Review*, Vol. 104, No. 214, 1867, pp. 1-30.

(18) Edward Maria Wingfield, "A Discourse of Virginia," ed. by Charles Deane, *Archaeologica Americana: Transactions and Collections of the American Antiquarian Society*, Vol. 4, 1860, pp. 67-103, esp. ft. nt. 8, pp. 92-95.

(19) Edward D. Neill, *History of the Virginia Company of*

- London, Albany, 1869, pp. 83-105, 211.
- (20) Paul Lewis, *The Great Rogue: A Biography of Captain John Smith*, D. McKay, 1966.
- (21) William Wirt Henry, "The Rescue of Captain John Smith by Pocahontas," *Potter's American Monthly*, Vol. 4, 1875, pp. 523-28, 591-97.
- (22) Charles Poindexter, *Captain John Smith and His Critics*, The Society for Geographical and Historical Study of Richmond College, 1893.
- (23) J. A. Leo Lemay, *The American Dream of Captain John Smith*, University Press of Virginia, 1991; do., *Did Pocahontas Save Captain John Smith?*, University Georgia Press, 1992.
- (24) Lemay, *Did Pocahontas Save Captain John Smith?*, pp. 63-65.
- (25) Philip L. Barbour, *Pocahontas and Her World*, Houghton Mifflin, 1970, pp. 24-25.
- (26) Paula Gunn Allen, *Pocahontas: Medicine Woman, Spy, Entrepreneur, Diplomat*, Harper, 2003.
- (27) *Ibid.*, pp. 28-54.
- (28) *Ibid.*, pp. 11-14.
- (29) Linwood "Little Bear" Custalow and Angela L. Daniel, *The True Story of Pocahontas: The Other Side of History*, Fulcrum Publishing, 2007.
- (30) *Ibid.*, pp. xxiii-xxiv.
- (31) 註記 (7) を参照。

(大妻女子大学比較文化学部教授)